

# 作業所学会を振返って

研修部会長 安間孝明

実は、記念講演の講師選任を巡って、私の中で一波乱ありました。理事会、政策委員会の中で意見を伺った所、数人の方から「増田先生のお話しを聞きたい」との要望が上がりました。私も同感で、年に一回は、支援の原点に立ち返るような増田先生の話を聞く必要があると常々思っておりまして、アポ取りを致しました。

私は、安易に「作業所とは」と大枠を決めて、お願いすれば良いと思っていました。研修委員会を開催して、話を詰めていくと「今更、そんな事を増田先生に求めるのは、返って失礼だ」と指摘されました。『確かにその通りだ。』と自身の安易さを責めました。

「長く教鞭を執ってこられた先生の研究テーマの話を聞きたい」との意見が出て改めて先生にご連絡をしました。すると、先生から「私の話は皆さん聞き慣れているから、私が推薦したい先生がいるのでいかがですか？」とのお返事でした。「いえ、私としては、既にお願ひしたように先生のお話をお伺ひしたいのです。委員や理事の総意です」と頑として譲りませんでした。

増田先生に新たな重責を受けられる準備の為に、どれ程多忙な日々であったかを知る由もなく、悪い強引な「安間」が出ていました。後にこの時、どれ程増田先生を困らせていたのかを想像し恥入るばかりです。増田先生、本当に申し訳ございません。この紙面をお借りしてお詫び致します。

この後、先生も「強引安間」に閉口されていたかとは思いますが、改めてお電話を頂きました。「浜渦先生は、臨床哲学の先生で以前より私も改めてお話しを聞いてみたいと思っていました。私が進行役をやりますので、私の責任の中で認めてもらえないでしょうか。」

とまで言わせてしまいました。当然、そこまで増田先生に言わせてしまった私の不徳を反省し、「先生がそこまでおっしゃるなら、お任せ致します」と研修委員の皆さんに理解を求め、浜渦先生のお話しを伺う運びとなりました。結果は、聞かれた方は異論なく、作業所学会ならではの深い支援の原点を探られるお話しとなりました。これ程、臨床について深く考えた事は、元来、単純な私はありませんでした。「人は、生老病死の中で最後は、誰でもケアされて死んで行くのだ。相互の生の中で依存しながら存在している。誰にも迷惑を掛けない生活など存在しない。」至極当然な事を自覚していない自分に気づかせてくれました。途中で事務局の遠藤さんとメールで「目茶苦茶面白いね！」と感動を共感した程でした。障がい当事者と専門家のお話の中で、視覚障がい者の手引きの例を出されました。「パラスポーツのガイドランナーをつなぐのは、一本のロープ。自助と自助の援助をする専門家は、弱くなる事を選択した人と言うのだ」との表現に『果たして自分は弱くなる事を選択しているのだろうか』と今回の選任騒ぎの自分のやり方を反省しながらこれを書いていて、今も考えさせられています。当事者の皆さんの目線に立つことすら出来ていない自分ではないか。その人の置かれた状況や痛み、「弱さを選ぶ」どころか、理解も想像も出来ていない自分であると反省させられています。「作業所」と共に歩んで来て下さった増田先生だからこそ、私たちが学ばなければならぬ事を見事に掴んで下さっていると唯々、感服するばかりです。増田先生の当会を大切に下さる姿勢と、浜渦先生の今の自分たちが振り返る必要のある講演を聞いた事が宝と、学会を終えて痛切に感じました。